日本語ボランティアの現場レポート

社会福祉法人

さぽうと21 国内に暮らす外国人の自立を支援する学びの場を提供

ボランティアで日本語を教える現場とは？　どのような内容を教えるのだろうか？
東京都品川区で日本語教室の運営をはじめ、外国人の生活支援を行っている
「さぽうと21」の学習支援室にお邪魔した。

生活に密着した日本語を学習

さぽうと21は、日本での生活に困難をきたしている難民やその家族、在日外国人などの自立支援事業を行っている。NPO法人難民を助ける会を母体とし、姉妹団体として1992年に設立。生活支援事業の一環として、日本語教室、パソコン教室の運営、学校教科の補習などの学習支援を行い、毎週土曜日に開放している学習支援室には多くの外国人が訪れる。

現在の登録学習者は100名ほどにのぼる。来日背景から近隣の日本語教室には通学しにくい難民の人々が多いため、都内各地から電車で通う外国人も多く、その8割以上がミャンマー国籍だ。その他、スーダン、コンゴ、ベトナム、カンボジア、イラン国籍などの外国人がいる。グループ学習もあるが、基本はボランティアと学習者が決まったペアを組んで学習を進めている。

学習支援室
コーディネーター
矢崎理恵さん

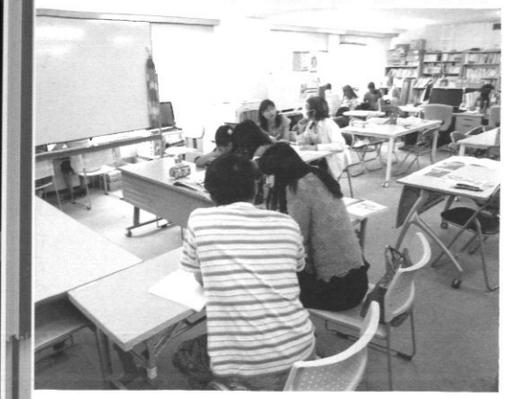
日本社会で自立していくために、「とにかく日本語が上手になりたい」「日本語能力試験に合格したい」という学習者も多いが、その一方で、生活に密着した日本語や日本事情についてもさまざまな質問が投げかけられる。例えば、市役所や学校でもらった書面や新しく買った商品のマニュアルが読めない、病院を受診する際や冠婚葬祭の場面でのわからないこと、住宅を申し込む際や進学情報でのわからないことなど

社会福祉法人 さぽうと21
東京都品川区上大崎2-12-2
ミズホビル3F
TEL 03-5449-1331
http://www.support21.or.jp
info@support21.or.jp

だ。1人の学習者が、進学のために試験合格を目指すこともあれば、就職のための面接の練習を必要とすることもある。

「長年通っている学習者も多く、学習者の数は増える一方です。一方で、ボランティアの数は増えてはいるものの、留学や転勤など学習者の数に追いつくことはありません。慢性的に不足しています。興味のある方にはぜひ参加していただきたいです」と学習支援室コーディネーターの矢崎さんは話す。

ボランティアは現在、日本語教室に限らずパソコン教室、教科補習も含め、90名程度が登録している。平日に開講することの多い県や区の国際交流団体とは異なり、土曜日に開講しているため、20代から40代の社会人も多い。プロの日本語教師もいれば、養成講座修了者や通学中の人、日本語教育能力検定試験合格者もいる。まったくの未経験者もさまざまな形で支援に加わっている。



土曜10時～18時の開放時間内に学習者とボランティアがペアで時間を決めて集合。大体2時間ほど学習する。

学習者の背景を理解することも大切

ボランティアへの参加は登録制で、応募資格は特になく、一度面談を行う。

「学習者とのペアを決める際は、学習者が何を必要としているかというニーズや環境を考慮して、合いそうな方にお願いします。学習者のニーズによって、ボランティアの方には『この教科書を使ってみては？』といったアドバイスをすることもあります」

中には、思った以上に学習者が熱心でとまどう人もいるという。

「学習者は生活する上で日本語を本当に必要としているので、そうしたたちばかりなので、学習者への理解も大切ですね。バランスが難しいですが、ボランティアだからといって手抜きはせず、かといって無理もせずに活動を楽しめる人に参加していただきたいです。それから、学習者がなかなか覚えられなくても気長に取り組めること。教えるだけでなく、相手の話も聞き、受け入れられる人だと学習者ともよい関係が作れます」

日本語学校での教師経験のある矢崎さんは、「日本語学校ではレベルの近い留学生などに順序立って教えられますが、ここに来ている学習者は日本で10年から20年にわたり生活をし、その中で自然に身につけたことと、努力して身につけたことがそれぞれバラバラです。学習者の状況やニーズに応じて教えることは難しいですが、面白い部分でもあります」と話す。本当に日本語を必要とされる中での学習は、教える側にとっても勉強になるようだ。

VOICE

日本語ボランティア
平村和美さん

実際に教えることで多くのことを学べます

日本語学校の養成講座を修了し、1年4カ月ほど前からボランティア講師をしています。マンツーマンでの日本語教室に加え、6～7人のグループ授業のアシスタントもしています。養成講座修了後、就職先がすぐには決まらず、何か経験を積みたいと思っていたのがきっかけです。さぽうと21での活動を選んだのは、日本に暮らす難民の方々と、実際に出会って何かしたいと思ったからです。ボランティアで教えていると養成講座で頭の中だけでわかっていたつもりのことが、実際に学習者の発話にみられ、本当の理解につながります。

学習者は生活での苦労も多いはずですが、明るく熱心に勉強する姿勢にこちらが元気づけられることも多いです。一番勉強になるのは「雑談」かもしれません。雑談を通して、相手の文化や考え方などを知ることができるからです。ミャンマーの方が大勢いらしていますが、親や先生を敬う文化が深く根付いていて、いつも感心させられます。ボランティア講師を始めた昨年は検定試験にも合格し、この夏からは日本語学校で教師としての仕事も始まります。ここでの経験が生かせるように頑張りたいと思います。

平村さんはミャンマー人の女性2名を担当。この日は「今○時です」などの表現を学習。